

地域創造の未来

前 NHK 長崎放送局長

Profile

三好 達夫 Miyoshi Tatsuo

福岡県北九州市生まれ。九州大学文学部哲学科卒業。1974年、NHK 入局。福岡放送局、沖縄放送局を経て、主に本部番組制作局でディレクター、チーフプロデューサーを務め、「NHK スペシャル」や「クローズアップ現代」など、ドキュメンタリー系の番組制作を担当。1999年、社会情報番組部統括担当部長、「プロジェクト X」を立ち上げる。2003年、NHK 長崎放送局長。現在、日本放送出版協会（NHK 出版）執行役員・編集局第一家庭編集部長。

更にアピールすることは勿論ですが、近代日本の原動力となった長崎が再び脚光を浴びる仕掛けはないものか。歴史に学び、未来を切り開く。というコンセプトを一人で発酵させていました。

江戸の中・後期。若者たちは何故長崎をめざしたのか。長崎で何を得ようとしていたのか。当時のファクトを紡ぎモデルを編み出そうとしていた。去年の夏、長崎県美術館館長の伊東順二さんがひとつの提案を持ち

私 は今、長崎の地を離れています。が、今でもボランティアで支援させていたにいて、長崎水辺の映像祭に對する思いを少し述べさせていただきます。と思います。

私はNHK長崎放送局に着任して以来、微力ながら地域に貢献できることは何か自問し続けていました。

世界の中でNAGASAKIはかなり知られている。ならばこの都市はもうと輝いてはいはずだ。被爆地ナガサキの存在を

“長崎水辺の映像祭”への思い

込んで来られました。全国に募集をかけ、デジタルアートの映像祭がやれないかというものでした。私はその場で諸手を挙げて賛成し、側面から支援すると約束しました。映像祭が発火点となって、長崎の夢が広がっていく様子を想像し、場が大いに盛り上がったことを鮮明に思い出します。デジタルアートは先端の映像芸術の分野であり、映像表現の世界に自己実現の場を求めている若者たちが長崎に注目し、長崎をめざすかも知れない。そして、将来この地でクリエーターたちが育ち、ここを拠点に映像作



前 NHK 長崎放送局長
三好 達夫
Miyoshi Tatsuo

品を発信する...

「Heart 2006 Nagasaki」長崎水辺の映像祭」は、地元経済界の多くの方々のご支援、大学関係者の方々のご協力のもと、この八月、表彰式がとり行なわれ、様々な連動企画が展開されました。発想からわずか一年、まさに時間との闘いでした。急がないと他の地域で同じような企画が進むかも知れないという焦りもありました。この間、

長崎市内の四大学の学生さんたちが映像祭に深く関わり盛り上げようと学生「コンソーシアム」代表・長崎大学経済学部四年生・之上絵美さんを結成し、映像祭のPRスポンサーを制作、また映像祭への道のりの一部始終を映像で記録しています。未知の領域に体当たりで挑んでいる姿を私は目を細めて見つめていました。

話は戻りますが、歴史に学び、未来を切り開く。このことを突き詰めている過程で思い描いたことのひとつが、二十一世紀の文化創造基地・長崎という考え方でした。比類のない歴史・文化を礎に、今再び新たな文化を創造する。少なくとも私は今回のデジタルアートの映像祭をそのように位置付けています。

平成十七年、春に長崎県美術館 秋に長崎歴史文化博物館が開館しました。未来への遺産を集積するこれらの文化拠点が高年に誕生したこの年を、個人的な思いとして私は、新たな文化元年と呼んでおります。二十一世紀の文化創造基地づくり発達の年です。そして平成十八年、新たな文化二年、長崎水辺の映像祭が開催されました。長崎が未来に向かってまた一歩進んだ気がいたします。

京都では芸術都市の創造をめざす京都ルネサンス運動が展開されていると聞いています。近いうちに、長崎ルネサンスという言葉がきつと聞こえてくることを願っています。